

知のシステムの転換とインターンシップ

田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚編著

『学校インターンシップの科学』

ナカニシヤ出版 二〇一六年三月

ある研究会で、教育臨床に携わる研究者の発表を聞いた時のことである。前半は理論的な話で、それは欧米の議論に発する最先端のかなり深い問題に差し迫り、聞く者の知的興奮を引き起こすのに十分であり、後半は実践的な話で、これも現場の悩みを感性豊かにくみ取って論じられ、深く考えさせられる中身を持つていた。私はその両者の重要な話がどう接合していくかに注目し、次の展開を待った。だが話はそこで唐突に終わってしまった。私がショックを受けたのは、その「乖離」について、一言の弁明もなく、あたかも当然のことであるかのごとくに発表がそのまま終わったことである。

理論と実践のこのような乖離は自然科学の分野ではそもそも起こりにくい。理論はあくまでも「物の扱い方」という実践的技術と不可分だからである。だが人を扱う人文社会科学の分野では往々にして悲劇的なまでの乖離が生ずる。なぜならその理論が生まれた文化社会における「人の扱い方」と、それを移入する側のそれに差があり、異なる文化的文脈に基づいて作られた理論は簡単には他の文化的文脈に應用できないからである。アメリカを中心に発達した社会心理学や比較文化心理学の理論が日本に当てはまりにくいものが多かったこと、欧州に根を持つ近代法の理論体系が常に日本社会の現実と齟齬を持ち続

けたことはその典型例である。

世界に対して知をリードした経験に乏しい日本では、この乖離の根はおそらく非常に深い。そこでは古代から、知的エリート的重要な仕事は海外の先進的な理論を日本に紹介し、この社会の在り方との乖離を最小限にして応用可能な形に「翻訳」することであった。その異質な海外の「理論」の探求の場としての高等教育機関は、そもそも現場と乖離する運命にあったと思える。そしてその乖離を糊塗する方法が、現場と研究者の世界の「棲み分け」であり、研究者は自らが見た世界の「最先端」を「遅れた」現場に「啓蒙」する役割を持ちつつ、実際はあまり深く介入しない態度を作り、現場はその「最先端」を一応「拝聴」しつつもしばしば敬して遠ざけ、再び日常の実践に自らの感覚と経験で臨む態度を作っていたように思う。冒頭のエピソードは、そのような棲み分けの実態が、両者を行き来する研究者の発表にそのまま反映されたものではなかったか。

本書はこのような現場と研究者の世界の乖離をどう乗り越えながら新たな「科学」を創造していきけるのか、ということについて、教育というフィールドにおける挑戦の書ともいえる。扱われているのは、教職をめざす学生が、大学の教育活動の一環として、教育現場の日常的な活動に参加する経験をつむ「インターンシップ」の展開である。過去の教職教育では、大学で現場とは一定の距離を保ちつつ教育に関する基礎理論や知識、基本技術（学問知）などを教え、学生は教育実習で現場の教師の指導の下で現場の知恵を学び（実践知）、資格を取って将来の教師としての仕事に備えるという形で行われていた。それに對してここでインターンシップは大学と学校現場という異質

な二つの世界の境界を乗り越え（越境）、その間を行き来（往還）する存在として学生をとらえ、その両者の中間的領域の中で異質なものが出会うことで新しいものが生み出されていく過程（共創的越境）として、よりダイナミックに事態をとらえ、その創造的過程を推し進める方策を探し求めようとする「田島・プロローグ」。

異質なものが出会ったとき、相手を拒否して自己の枠に閉じこもるのではなく、そこから新しいものを共に生み出そうとするには、それまでの自分に形成された固く狭い暗黙の前提が見直されなければならない（省察）「森下・第十一章」。それは現場と学生、学生間、教師と学生の間を生じる、見え方のずれ（二重のヴィジョン）が生み出すことになる「山口・第六章」。それは単に知的理解のレベルで起こることではない。そこではその状況に臨む主体としての自己自体の多元性が立ち現れ、それらの再構造化が促される「溝上・第四章」。インターンシップにおいて学生は大学と学校という異なる実践共同体間を移動し続け（相互変移）、学生と教員という二重のアイデンティティを共に抱えることになり、そこに境界領域が生まれ、対話的關係調整を通して両共同体の柔軟化の契機になる可能性が生まれる「高木・第五章」。

この曖昧さを持つ境界領域生成の例は、正規の授業外に学生が中心となつて半ばボランティアに生み出されたチーム学習活動（HELIC）の中にも象徴的に見出される。学生の境界領域的な非正規的活動が正規の授業をも変容させ始める「香川・第七章」。ここに至つてインターンシップという活動は、実践知に触れることで学問知を変容させる可能性を生み出す場と

なってくる。その学問知の変容は研究者の対話的な柔軟性にかかっている。通常の授業では「教えられ」、教育実習でも「指導される」受動的対象であつた学生が、インターンシップへの参加を通して学問知と実践知の双方を相対化する能動的な場となり、そこに研究者の自己の変容も起こる「有元・第十章」。さて、これまでややもすれば分離しがちであつた教職課程における学問知と実践知の世界を、インターンシップという形で結ぶ可能性を生み出した直接の力は何だろうか。それは新たな時代の要請に応え、現場対応力を備えた教師養成システムを構築しようとする、文科省を中心とした施策であり「麻生・第一章」、その背景には先行するアメリカの経験がある「佐藤・第二章」。さらにそのような動きは、より大きな背景として文部省・通産省・労働省（いずれも当時）による、教職に限定されない産学連携の推進としてのインターンシップの本格的導入を目指した「三省合意」があり、それは行政主導の高等教育改革の突破口としても意識されている「加藤・第十二章」。

興味深いことに、この背景事情についての論考と前述のその他の論考の間には、理論的基盤に違いが感じられ、前者の諸論考が学習の考え方についてヴィゴツキー系の議論を核とし、また現場で新たな知が生成される過程についてはショーンの「実践の中の省察」が重視されるのに対し、後者はそれらの理論的視座は特に採用されず、よりダイレクトに「現場に出て創造的に活躍できる学生を産学連携の中でいかに育てるか」という実践的な試みの分析に重点が置かれている。同じ「インターンシップ」という言葉を用いつつ、その両者でイメージされている中身にはかなりの差異が感じられ、同様に「学問知」「実践知」

とは何か、ということの基本的な理解にもずれが感じられる。

その意味で本書の中には「共創的越境」について異質な声が響いているとみることもできる。端的に言えば、前者が大学と学校という異質な共同体の間の往還を問題にしたのに対し、後者はさらに行政というもうひとつの共同体の論理を持ち込んでいるのだが、教育という社会現象をリアルにとらえるには、この両者の関係をどう考えればよいか、という問題を避けて通ることはできないだろう。この異質な声の出会いの中でどのような「共創的越境」が見通されるのか、そのような越境を可能にする理論的視座は何なのか、という問題について、私はそれを考える手がかりを本書の中に見出すことはまだできなかった。その問題は我々研究者が何のために現場にかかわらなければならぬのか、そこで何を解決し、何を実現しなければならぬのか、ということについてのさらなる探求を伴って検討されて行かなければならない今後の課題のように思える。

少し引いた位置からこの問題を考えてみれば、もはや近代の終焉が誰の目にも明らかかな歴史的状況の中で、世界が次を模索している、その流れのなかに、大学という知の権威と現場の実践知との関係の組み換えが世界中で課題になっているのだと私には思える。グーグルによる新たな情報システムの創造、ウィキペディアに象徴的な「専門家」と「素人」の垣根を崩す知の蓄積システムの展開、ウィキリークスによる「権力的な情報秘匿」の破壊、SNSを介した「私的つぶやき」からの新たな社会勢力形成、アメリカ大統領選挙で明らかになったマスメディアという知的権力の敗北などは、いずれもそのような近代的な知の構造の転換を表す現象とみなせるだろう。

そしてそのような知の枠組みの転換が、会社から国家に至る組織の固定的な枠組みをつぎつぎに相対化し、これまで世界の枠組みを領導した西欧近代とはきわめて異質な、中国という巨大なもうひとつの「社会的な生き方」の台頭による国際秩序の変容、ネットによって可能になった現代的テロリズムによる世界の動揺などを伴う形で展開している。近代の知の枠組みが現実世界の中で次々に無効化していく中で、我々がどのような新たな知の地平を切り開いていけるのか、という問題は、きわめて切実であることは間違いない。

本書が問題とするインターネットの教職課程への導入という流れは、そのような世界的な知の構造の転換過程の中に改めて位置づけるとき、よりよくその意味を理解できるだろうと私は考える。ではそのような巨きな歴史的課題を抱えて、この分野で我々にできる基礎的な作業は何だろうか。

私は異質なものの出会いの中で揺れ動き、何かを生み出しつつあるインターネットの学生の「小さな」活動を、そしてそれに触れて変化する現場の教師や大学の教員の在り方を、丁寧に記述・分析していくことだろうと思える。そこに見出される小さな変化が的確に省察されたとき、そこに生み出された知や、そこから漏れ出てくる小さなつぶやきが、大学と現場などという旧来の枠組みを超えて、いつかネットという新たな空間を媒介に急速に大状況の変化につながっていくと思えるからである。本書もまたその契機の一つではないだろうか。

(発達支援研究所長 文化発達心理学 山本登志哉)